日本佛教学会第 95 回学術大会レジュメ

『阿閦仏国経』における女性像 ― 大乗仏教における女性の地位の変遷 ―

佐藤直実（京都大学）

阿閦仏の主宰する東方・妙喜世界は、女性が住んでいる仏国土として有名である。阿閦仏は、大乗仏教黎明期に登場する他方仏で、西方・極楽世界の阿弥陀仏と並び称されることが多い。極楽世界には女性がいないことから、阿閦仏は女性を擁護する仏として受け止められる傾向にあった。本発表では、初期大乗経典『阿閦仏国経』に記される女性像を軸に、仏教における女性の地位の変遷を確認したい。

『阿閦仏国経』における女性に関する記述は、第 1 章（阿閦の発心・誓願・授記）と第 2 章（成道後の妙喜世界の描写）に集中している。第 1 章では、阿閦の菩薩になるための誓願として、「女性に説法する時に、妄想を抱いたり、女性を惑わせるような態度を取らない」こと、また、成道した暁には、阿閦が主宰する妙喜世界の女性たちに、現世（娑婆世界）の女性が持つような欠点が存在しないことが記される。第 2 章では、妙喜世界の女性の優れた点が述べられる。たとえば、妙喜世界の女性は、転輪聖王の「女宝」をも凌ぐ美徳を備えていること、妊娠・出産の苦しみや女性特有とされた欠点が存在しないことなどである。ここでいう欠点とは、嫉妬、二枚舌、怒り、吝嗇などの心の性質に加え、妊娠や出産、月経に伴う苦痛といった女性特有の身体的な苦しみであり、これらは初期仏教以来、繰り返し語られてきた内容である。

以上のように、『阿閦仏国経』では、女性の欠点の解消や美徳については詳しく述べられるものの、女性の修行や成道については全く言及されない。妙喜世界には女性が存在するため、一見すると女性に肯定的な仏国土として描かれているように見えるが、その女性たちは修行の主体としては位置づけられていないのである。これに対し、『無量寿経』第 35 願は、女性が男性として極楽に生まれ、成仏に向かうことを説いている。また、『法華経』龍女成仏説話のように、後代の大乗経典では女性の成仏・成道が正面から論じられるようになる。『涅槃経』では、「一切衆生悉有仏性」が説かれ、女性にも成仏の道が開かれるようになる。繰り返しになるが、『阿閦仏国経』における女性は、現世の女性に付随すると考えられる身体的・精神的欠点を克服した理想的存在として描かれてはいるが、成仏や修行の主体としては扱われていない。一方、『無量寿経』や『法華経』、『涅槃経』では、女性が成仏の可能性を持つ存在として位置づけられるようになる。『阿閦仏国経』の女性像は、大乗仏教において女性が成仏や修行の主体として位置づけられていく過程を考える上で、重要な一段階を示していると言える。

キーワード：阿閦仏国経、妙喜世界、女性の成仏